

第4章 公立図書館における地域資料サービスに関する事例及び自由意見

1 事例

本項では、平成28年度に実施した「公立図書館における地域資料サービスに関する実態調査」をもとに、全国7地区の中から12館を選択し、事例として報告する。

(1) 事例の選択

事例として取り上げた図書館は、平成28年度調査の回答で、①積極的に地域資料サービスを実施していること、②規模が大きすぎない（一部例外を含む）、に留意をして選択した。また、できるだけ多様な実態を知るため、③特定のサービス（たとえば児童向けサービス）に集中しないよう配慮するとともに、④すでに地域資料サービスの先進事例として、様々な機会で紹介されている図書館は除いた。

このうち、①②の理由は、そうした図書館を取り上げることで、事例が多くの図書館にとって参考になり、実施の契機となることを意図したものである。④については、このサービスの定着状況や、広がりを知るうえで重要と考えたことによる。

また、事例の多くは基礎自治体の図書館のものであるが、県についても千葉県、富山県を選び報告してもらった。

掲載館は、以下のとおりである。掲載順は、総務省で設定している都道府県コード及び市区町村コードの順とした。

ブロック	都道府県名	市区町村名	図書館名
北日本	宮城県	塩竈市	塩竈市民図書館
関東	千葉県		千葉県立中央図書館
関東	千葉県	浦安市	浦安市立中央図書館
東海・北陸	富山県		富山県立図書館
関東	長野県	下條村	下條村立図書館
東海・北陸	愛知県	田原市	田原市中央図書館
近畿	奈良県	斑鳩町	斑鳩町立図書館
中国	広島県	広島市	広島市立中央図書館
中国	広島県	三次市	三次市立図書館
四国	愛媛県	今治市	今治市立中央図書館
九州	佐賀県	小城市	小城市民図書館
九州	鹿児島県	鹿児島市	鹿児島市立図書館

(2) 記載内容

依頼にあたっては、サービス開始から現在まで、おおよそ時系列になるよう、項目を設定した。具体的には、(1)基本データ、(2)自治体及び図書館の概要、(3)地域資料サービスの概要、(4)サービス内容・特徴、(5)取組の成果や課題、(6)今後の展望、である。

塩竈市民図書館における地域資料児童向けサービスの取組

基本データ

自治体名	宮城県塩竈市
図書館名	塩竈市民図書館
人口	54,959人
職員数	19人
うち、地域資料担当の	
専任職員数	0人
兼任職員数	3人
蔵書冊数	232,208冊
年間貸出冊数	192,367冊

図書館外観



1 塩竈市及び図書館の概要

塩竈市は宮城県のほぼ沿岸中央部、県都仙台市の北東約16Km、特別名勝松島の一画、千賀ノ浦（塩竈湾）を囲むように位置する。市域面積は、17.37㎢と、東北の市の中でも最も狭く、人口は54,959人と人口密度が高い都市である。

まちの歴史は古く、古代には陸奥の国府多賀城の津として、平安時代には歌枕の地として都人の憧れの地となり、藩政時代には鹽竈神社の門前町や漁港として栄えた。

明治以降は国内有数の港湾都市として、近海・遠洋漁業の基地としても発展してきた。「全国有数の鮮マグロの水揚げ港」に代表されるように、新鮮な魚介類が豊富であることを生かし港町独特の食文化がつけられている。水産加工業も盛んであり、笹かまぼこなどの水産練り製品などは日本有数の生産量を誇っている。

現在はこうした様々な地域資源をいかし、「おいしさと笑顔がつどうみなとまち塩竈」をスローガンに、まちづくりをすすめている。

図書館の歴史も古く、大正6年に塩竈尋常高等小学校内に塩竈町立図書館として誕生し、今年で100周年を迎えた。

現在の図書館は平成3年に、市のほぼ中心部に位置する再開発ビル「壺番館」内に移転し、より市民のための図書館でありたいという願いから、「市立」から「市民図書館」に名称も改め、市民のための図書館運営を目指してきた。

図書館は、壺番館3階、4階に位置し、3階を一般書、リスニングコーナー、4階を児童書、AVコーナーとしている。移転当初から、児童書

コーナーの一面にYA（ヤングアダルト）コーナーを設置し、当時は青少年向けサービスの先駆けとして充実を図ってきた。また4階には歴史展示室「タイムシップ塩竈」がある。

他に、市内12カ所へ移動図書館「プクちゃん号」が月1～2回運行し周辺に居住する住民の読書活動の支援を行っている。



4階児童図書フロア

2 地域資料サービスの概要

子どもたちが、市民図書館で素敵な本と数多く出会い、読書好きな人に成長していけるよう、児童書フロアの書架では、独自の棚記号を用いて配架している。

例をあげると、「どうぶつ」「のりもの」「工作」「芸術」「ゲーム」などがある。こどもにわかりやすい棚記号にすることで、希望する資料が見つけやすくなり、子どものみならずその保護者からも児童書の棚記号は、たいへん好評である。

地域資料の棚記号は「ふるさとの本」。本市は市域に、特別名勝松島の浦戸諸島があり、まちの歴史も古いことから地域に受け継がれている物語も数多い。『しおがまの昔話』を底本に作成した『塩竈のむかし話絵本』をはじめ、県内地域パンフレット、小中学校の児童、生徒向けの『地域資料副読本』などを収集し、「ふるさとの本」の棚記号を付与し配架している。

また、前述したとおり児童書フロアの一面には、歴史展示室「タイムシップ塩竈」がある。古くから海運で賑わったまちを象徴する展示室で、コンセプトは「時間の船に乗って塩竈の歴史へ旅立とう！」というものである。古代から近代までの塩竈の賑わいや太平洋戦争時代の資料、また塩竈にふれた和歌などの文学や塩竈ゆかりの人物も紹介している。



タイムシップ塩竈

図書館を利用する子どもたちは、自分たちが生活している地域について調べるとき、棚記号「ふるさとの本」の書架から資料を選び利用することができ、さらに「タイムシップ塩竈」を見学することで資料を読むこと以外にも見て触れて聞いてという五感体験を通し、自分たちの地域についての学習を進めることができる。

このように子どもたちが図書館の利用を通して、地域の歴史や文化に興味をもち、塩竈で生まれたことに誇りを持ち、郷土愛を醸成し、次代のまちづくりを担う人材として活躍できるよう支援している。

3 児童向けサービス

本市では、市民の主体的な学習活動の展開に向けて、市民参加型、市民企画型の生涯学習活動を目指しており、そのモデルといえるのが「シオーモ絵本まつり」である。本項目では「シオーモ絵本まつり」と、そこで活用された「塩竈のむかし話絵本大賞」作品について述べる。

（１）地域ボランティアとの協働による「シオーモ絵本まつり」

最初に「シオーモ」という言葉について説明したい。「シオーモ」は、宮沢賢治の著書『ポラーノの広場』の中で、塩竈を指したとされている。原文では“そして八月三十日の午ごろ、わたくしは小さな汽船でとなりの県のシオーモの港に着き、そこから汽車でセnderトの市にいきました”¹とある。賢治は明治45年3月、16歳の時、修学旅行の途中、石巻から船で塩竈（シオーモ）に、隣町の七ヶ浜に泊まり、翌日汽車で仙台（セnderト）へという行程を辿っている。修学旅行で訪れた塩竈のことが、賢治の印象に残り、後日『ポラーノの広場』に登場してきたようだ。

平成27年度に「第1回シオーモ絵本まつり」が、本市生涯学習センターふれあいエスプ塩竈を会場に開催された。事業の企画運営は、絵本やまちを愛する熱い思いを抱いた有志による実行委員会である。“東日本大震災を経験し、学んだ言葉の力。私たちは多くを失いましたが、言葉でつながり、助け合うことで得たものも多くありました。そしてこの言葉の力を、絵本をキーワードに形にしたのが「シオーモ絵本まつり」です”と実行委員は語っている。

翌年には「第2回シオーモ絵本まつり」を開催。本市の生涯学習施設（市民図書館、ふれあいエスプ塩竈、杉村惇美術館）を巡る、三館同時開催となった。図書館で「読み」、美術館で「観る」、そして生涯学習センターで「遊ぶ」と一つの枠の中で回遊するものである。図書館では、オープニングセレモニーやおはなし会などが行われ、特に読み聞かせの仲間を増やすための「朗読講座」、自分のお気に入りの本を読む「ビブリオティータイム」が好評だった。

そして今年度、「第3回シオーモ絵本まつり」が、市民図書館と生涯学習センターふれあいエスプ塩竈の2施設を会場に開催された。

昨年度、好評であった「朗読講座」や「ビブリオティータイム」、大人のための絵本の読み聞かせ「トワイライト★大人のあなたへ」などや、当館児童書フロア内の創作室では、公開制作「シオーモ港駅（ミナト）」を開催。10月3日（火）から10月8日（日）の期間中、来館した子どもたちが自由に描いた絵と、本市出身美術家が描いた絵に若手詩人が詩をつけ、世界

¹宮沢賢治. “ポラーノの広場”. 『ポラーノの広場』. 岩崎書店, 1979, p.149, (新版・宮沢賢治童話全集, 10).

で1枚だけのオリジナル「1枚絵本」を作成した。

公開制作の作品テーマは、「鉄道」。そこで、「シオーモ港駅（ミナト）」に到着する世界各地の「汽車」を描いた作品を制作した。参加した子どもたちは、宮沢賢治も気に入ったであろう、蒸気機関車や港まちの発展とともに整備が進められた鉄道の歴史などを、自然に学ぶ機会になったのである。



公開制作「シオーモ港駅（ミナト）」の様子



館内に展示した「一枚絵本」

今年、児童書フロアを会場に開催した「シオーモ絵本まつり」も3回目の開催となり、オープニングセレモニーには、乳幼児から一般の方まで208名が来場し大盛況であった。

普段、図書館で活動している読み聞かせボランティア団体に留まらず、地域の子育てボランティアグループや、当館を頻繁に利用している近隣の幼稚園、保育園のみなさんの協力もあり、オープニングセレモニーの成功は職員にとっての励みとなり、また地域のみなさんが市民図書館を支え応援していただいていることを、改めて認識する機会にもなった。



「第3回シオーモ絵本まつり」オープニングの様子

（2）「塩竈のむかし話絵本大賞」作品の活用

「シオーモ絵本まつり」では、平成12年から14年度まで本市が実施した「塩竈のむかし話絵本大賞」作品の絵本や紙芝居も併せて紹介し、地域資料の活用に繋げている。

「塩竈のむかし話絵本大賞」は、昭和48年に教育委員会によって発行された『しおがまの昔話』を底本に作品を公募し、全国から作品応募があったものである。絵本大賞受賞となった作品は、絵本として製本し、たくさんの子どもたちに現在も愛読されている。

大賞受賞作品を絵本にすることは決定していたが、他の応募作品も何らかの形で後世に残したいとの思いから、当時担当の職員らが佳作となった作品を手作りで紙芝居にした。これらの作品は現在「ふるさとの本」の棚等に配架され、利用者が実際に手にとることができ、貸出サービスも行っている。「シオーモ絵本まつり」において再びその価値を見出され、地域に伝わる昔話をたくさんの方に知っていただく契機にもなった。

当館で現在活動している読み聞かせボランティア団体は、「塩竈のむかし話絵本大賞」作品を、市内外で頻繁に紹介をいただいている。こうした活動が実を結び、地域の多くの方々に「塩竈のむかし話絵本大賞」作品が読まれていることは、大変嬉しい限りである。

また、平成21年に市民図書館が制作したDVD『塩竈のむかし話』がある。読み聞かせボランティアが朗読を担当し、「塩竈のむかし話絵本大賞」3作品を収録・作成したものである。宮城県訛りの中でも、塩竈独特の言い回しやイントネーションを、収録当時70歳代のボランティアが収録したことで、このDVDは「方言」の地域資料としても活用されている。

歴史展示室「タイムシップ塩竈」で常時上映

されており、地域の子どもたちが来館した際に、地元の方言で語られる地元の昔話に触れられるよう役立てている。



当館で所蔵する「塩竈のむかし話絵本大賞」関連作品

4 成果と課題

東日本大震災で、本市も甚大な被害を受けた。浦戸諸島の地区住民から、「タイムシップ塩竈」の常設展示品としてお預かりしていた資料だけは大津波を免れた。震災体験を通し、公共図書館として、地域資料の収集・保存をする重責を再認識したところである。

保存されている資料を、いかに活用し後世に伝えていくかも重要である。これまで継承されてきた、伝承文学や民俗芸能等も含め、地域の歴史資料に詳しい人々が高齢となり、講師依頼も難しい状況になりつつある。後世に、地域の歴史を正しく伝えるためにも、早急に若い世代へ繋いでいく道筋を検討していかなければならない。

市民図書館が、まちづくりに関わり地域資料を幅広い年代に紹介していく手段のひとつとして、「シオーモ絵本まつり」を実行委員会とともに共催してきた。このことは少なからず、地域資料の周知に影響を与えたと考えている。

今後の課題としては、全国的に直面している少子高齢化を象徴するように、図書館ボランティアにも高齢化があげられる。「シオーモ絵本まつり」で好評だった「朗読講座」やプロの講師による講座も、講座プログラムの魅力もあり、受講希望者が多く好評であったにも関わらず、受講終了後に新規ボランティアを募ってみたが、残念ながら希望者はいなかった。

図書館ボランティアの高齢化や、利用者（子ども）の低年齢化を、日々の図書館業務を通し感じている。地域資料を保存し活用するためにも、人材の確保と現在活動しているボランティア団体の質的向上も含め、早急に検討すべき課

題である。

5 今後の展望

少子高齢化だからこそ地域の歴史や文化などに触れ、子どもたちが興味関心をもてるよう魅力的かつ現代の子どものニーズにマッチした事業を今後も地道であるが継続し、また、後世への伝承者として重要なボランティア団体の育成にも力を入れていきたい。

今回紹介した、市民の主体的な学習活動として先導的なモデルとなる「シオーモ絵本まつり」が今後も継続し続け、末永く発展していくことを大いに期待し、これらの取組により「未来へ羽ばたく塩竈っ子」の育成を目指してまいりたい。

(塩竈市民図書館

こどもの本の係:阿部祐未・柴田奈津子)

千葉県立中央図書館における地域資料児童向けサービスの取組

基本データ

自治体名	千葉県
図書館名	千葉県立中央図書館
人口	6,244,033人
職員数	41人
うち、地域資料担当の	
専任職員数	2人
兼任職員数	0人
蔵書冊数	865,250冊
年間貸出冊数	51,643冊（個人貸出）

千葉県立中央図書館外観



1 千葉県及び県立図書館の概要

千葉県は首都圏の東に位置し、四方を海と川に囲まれた半島にある。東は太平洋、西は東京湾に面し、北西は江戸川を挟んで東京都・埼玉県と、北は利根川を挟んで茨城県に接している。

古代は南から安房国、上総国、下総国の3つの地域に分かれ、これら3つの国を総称して房総と呼ばれている。2016年に北総4都市（佐倉・成田・佐原・銚子）が日本遺産に認定された。

面積は5,157.64km²で全国第28位。東京都に通勤する人のベッドタウンとなっており、千葉市から西側に人口が集中している。

京葉臨海地域にはコンビナートがあり、幕張新都心は幕張メッセを中心とした国際業務都市となっているほか、成田国際空港のある成田地域、マリンスポーツなどのスポーツ・レジャーが楽しめる長生・山武・夷隅地域、グリーンツーリズムなどのリゾート地となっている安房地域と、地域ごとに特徴がある。

県立図書館は中央図書館、西部図書館、東部図書館の3館があり、収集する資料やサービスを分担している。中央図書館は社会科学・千葉県関係資料・児童資料を重点的に収集している。以下、地域資料サービスの概要では中央図書館での取組を紹介する。

2 地域資料サービスの概要

（1）千葉県関係資料の蔵書について

県立図書館では千葉県に関する資料や情報の蓄積、継承を重点事業とし、特に中央図書館

では千葉県関係資料を網羅的に収集・保存し提供する千葉県資料室を設置している。担当はちば情報課で、千葉県資料室担当職員は2人である。

千葉県関係資料は中央図書館所蔵が84,430冊、県立図書館全体で111,158冊である。千葉県資料室が収集する千葉県関係資料は保存用と閲覧用に概ね2冊収集している。

（2）千葉県資料室のサービス

ア 調査相談・パスファインダー・展示

千葉県資料室では千葉県関係の調査相談に対応しており、平成28年度は個人や図書館等の機関から1,274件の調査相談があった。

また、問い合わせの多いことからパスファインダーを作成している。「千葉県の『人物』を調べる」「千葉県の『地名』について」など11のパスファインダーを作成、提供している。パスファインダーは千葉県立図書館ホームページで閲覧可能である。



千葉県資料室の展示の様子

他にも千葉県関係資料を展示し、展示リストを配布している。

イ 相互貸借による資料提供

中央図書館所蔵の千葉県関係資料は保存のため個人貸出はせず、館内閲覧としているが、複本がある資料については県内の図書館・読書施設に相互貸借を行っている。個人の利用者が相互貸借で利用する時には館内閲覧での利用を依頼している。

ウ 『千葉文化』での資料案内

中央図書館の館報『千葉文化』の表紙は「資料散策」という題で企画展示に関する千葉県関係資料を紹介することが多い。平成 28 年度の『千葉文化』では、県立中央博物館との合同企画展示「祝日本遺産 北総四都市江戸巡り」の資料として『成田参詣記』を紹介した。

エ 菜の花ライブラリーについて

千葉県立図書館のホームページで閲覧できる「菜の花ライブラリー」は千葉県に関する資料のデータベースで、「千葉県デジタルアーカイブ」と「索引」および「調べ方案内（パスファインダー）」で構成されている。

「千葉県デジタルアーカイブ」では主に江戸から明治時代の千葉県関係資料の画像を検索・閲覧できる。「成田山仁王門の景」などの錦絵、八犬伝関係資料、「上総国図」のような絵地図・地図、大原幽学関係資料、千葉県に関する古文書・記録を集めた『房総叢書』といった資料を見ることができる。

「索引」では、千葉県立図書館が作成した索引類を検索できる。「千葉県歴史関係雑誌記事索引」「千葉県関係新聞・雑誌記事索引」「千葉県関係人名索引」等が対象である。

「調べ方案内（パスファインダー）」では、統計や地図といった千葉県関係の調べ方案内を掲載している。

これらのデジタルアーカイブや索引を活用してもらえよう、菜の花ライブラリーの使い方を案内する県民向けの「菜の花ライブラリー」活用講座を実施している。

3 児童向けサービス

（１）来館者向けのサービス

児童資料室には千葉県の本のコーナーはあるが、資料はあまり多くない。また、新しく出版される資料も伊能忠敬など教科書に載るような人物の伝記が中心である。

あまり新しい資料が出版されない中で、おはなし会や展示などで千葉県関係の資料を来館者に紹介している。

ア 県民の日のおはなし会

毎年 6 月 15 日の県民の日前後に「県民の日のおはなし会」を実施している。この日は千葉県にちなんだ絵本を読み聞かせし、ブックトークも行う。平成 29 年度は千葉県名産の野菜が出てくる絵本を読み、千葉県博図公連携事業実行委員会が制作した千葉県の昔話絵本（『くるりのみんな ぬだおろち』『きつねのだんご』）の紹介を行った。

千葉県博図公連携事業は博物館・図書館・公民館との連携による地域文化発信事業で、県・市を問わず博物館・図書館・公民館が連携して事業を行っている。

イ 展示

平成 29 年度は千葉県に関する下記の展示を実施した。千葉県関係資料の中だけでなく、テーマに関する記述を含む資料を児童資料室の中から探し出し、展示リストを作成している。千葉県関係資料でない資料を活用する場合は、単なる書名リストではなく、どこに千葉に関する事項が出てくるのかを書いた展示リストを作成するようにしている。

・千葉県公共図書館協会創立 60 周年記念展示「子どもの本でめぐるちばの旅」

千葉県公共図書館協会 60 周年記念事業「我がまち、我がまちの図書館」にあわせて、谷津千潟や九十九里浜といった千葉県内のスポットやご当地の食・偉人などが出てくる本を児童資料室の中から探し、展示した。

・「チバニアン（千葉時代）ってなんですか？地層と地磁気のほん」

千葉縣市原市にある地層が年代を代表する国際標準模式地の候補となったという報道を受け、地層や地磁気に関する資料をそろえ、展示した。ほとんどが千葉県関係資料ではないが、千葉県の地層を観察した本を見つけて展示した。

・「東京湾アクアライン開通 20 周年記念 橋とトンネルのほん」

2017 年 12 月 18 日に開通 20 周年を迎える東京湾アクアライン（木更津・川崎を結ぶ東京湾横断道路）が出てくる本や、橋・トンネルが出てくる絵本を展示した。

これらの展示リストはホームページにある展示のお知らせから見られるほか、図書・雑誌・視聴覚資料検索の詳細検索のページ内「テーマ資料」のカテゴリからも子ども向けブックリストとして見ることができる。

（２）ホームページでの情報提供・広報

ア 児童向けパスファインダー作成

児童資料室ではよく問い合わせのあるテーマの調べ方案内を作成しており、千葉県関係は『千葉県の「人物」を調べる（小学生向け）』を 2015 年に作成した。このパスファインダーは県立図書館のホームページ内「調べ方案内（パスファインダー）」のページで見られる。また、児童資料室の千葉県のコーナーで配布している。

イ 千葉県の民話のリスト作成

千葉県立図書館ホームページ内の「こどものページ」で民話のリストを公開している。平成 20 年頃に実施していた「ぶらり千葉学」という郷土資料関係のテーマ展示の際に作成された。児童資料室が所蔵する児童向けの千葉県の民話のブックリストで、大まかに対象年齢順に並べている。

（３）県内図書館等読書施設・学校を通じたサービス、図書館員向け研修

ア 市町村立図書館・学校向けの資料提供

千葉県資料室の複本や、児童資料室・西部図書館・東部図書館所蔵の千葉県関係資料については市町村立図書館・学校図書館へも貸出を行っている。市町村・学校から来る児童向けの千葉県関係資料を借用したいという依頼は中央・西部・東部の図書館連携課で受付けている。児童資料室にも照会があり、テーマに沿った資料を提供している。

「郷土の偉人を調べたい」「学校周辺の石仏や道祖神を調べたい」といったテーマで資料を集め、貸出を行っている。

イ 児童サービスにおける千葉県関係資料の研修と郷土の偉人ブックリストについて

千葉県公共図書館協会の平成 25 年度児童サービススキルアップ研修会で、参加者のグループワークにより千葉県の偉人のブックリストを作成した。青木昆陽や伊能忠敬等 34 人を取り上げ、該当の人物について記載されている資料をリストアップしている。何ページの記述か、何年生くらいで読めるか、写真や年表などがあるかといった情報も載せたリストで、千葉県公共図書館協会加盟館に年度末の研修会だよりの付録として配布した。平成 29 年度の児童サービス基礎研修会第 4 回レファレンス研修の際も参考資料として配付し、大変好評だった。平成 29 年 12 月現在、平成 26～29 年度出版の資料を追加した改訂版リストを作成中である。

4 成果と課題

児童向けの地域資料はなかなか出版されないが、調べ学習などで地域を調べたいというニ

ーズはあるので、できるだけ新しい資料で地域資料として使えるものを普段から探し続ける必要がある。

そういった点では、これまでに作成してきた千葉県内の偉人のブックリストやパスファインダーは資料を提供する手がかりになるので、県内図書館員向けの児童サービスのレファレンス研修で配布すると評判が良い。

ただし、紙のままのリストでは担当者以外の目に触れないし、検索するときなど使いにくいので、ホームページに公開するなど、だれも見られる形にしていく必要がある。

5 今後の展望

中央図書館内に設置された子どもの読書活動推進センターでは、平成 27 年 3 月に策定された「千葉県子どもの読書活動推進計画（第三次）」に基づき、子どもの読書活動の発展と充実に努めている。千葉県関係資料に関しては「子どものための郷土資料の充実と情報発信」という任務がある。

その実行のために、これまで児童資料室で作成してきた民話のリストをさらにお話ひとつひとつに分けた索引をつくり、市町村単位で伝承されている民話を探せる仕組みを作っている。また、郷土の偉人リストも、最近刊行された資料を追加・整理し、ホームページで公開する予定である。

児童向けの郷土資料を作成するのは難しいが、資料と児童を結びつける仕組みを整備していきたい。



千葉県公共図書館協会創立 60 周年記念展示

「子どもの本でめぐるちばの旅」

（千葉県立中央図書館 読書推進課 子安伸枝）

浦安市立図書館における住民との協働について

基本データ

自治体名	千葉県浦安市
図書館名	浦安市立中央図書館
人口	167,694 人
職員数	33 人
うち、地域資料担当の	
専任職員数	0 人
兼任職員数	4 人
蔵書冊数	1,176,123 冊
年間貸出冊数	1,992,908 冊

図書館外観



1 浦安市及び浦安市立図書館の概要

(1) 浦安市の概要

浦安市は、東京湾の奥部に位置し、東と南は東京湾に面し、西は旧江戸川を隔てて東京都江戸川区と対峙し、北は市川市と接している。面積は 16.98 ㎢である。土地は、旧江戸川の河口に発達した沖積層に属する低地と、その約 3 倍に及ぶ公有水面埋め立て事業によって造成された埋め立て部分からなり、おおむね平坦である。

J R 東京駅から、東京メトロ東西線で浦安駅まで 18 分、J R 京葉線で新浦安駅まで 17 分の位置にある。

市は、大きく分けて 5 つの地域からなり、それぞれの地域ごとに異なる表情をもつまちとして発展している。

古くからの市街地を中心とする「元町」、住宅・商業用地として整備され発展してきた「中町」、また計画的に都市開発が進められている「新町」、そして、鉄鋼流通などの工業が集約されている「工業ゾーン」と、東京ディズニーリゾートとホテル群を中心とした舞浜「アーバンリゾートゾーン」である。

(2) 浦安市の変遷

明治 22 (1889) 年 4 月、町村制の施行にともない、堀江、猫実、当代島の 3 村が合併して「浦安村」となり、明治 42 (1909) 年 9 月に「浦安町」となった。東京に隣接しながら三方を海と川に囲まれた陸の孤島であったため、明治、大正、昭和も戦前までは大きな発展はなかった。

昭和 37 (1962) 年に漁業権の一部を放棄、昭

和 39 (1964) 年から海面埋め立て事業が始まると浦安は大きく姿を変えていった。昭和 44 (1969) 年に現在の東京メトロ東西線が開通、昭和 46 (1971) 年に漁業権を全面放棄して第 2 期海面埋め立て事業が行われた結果、総面積はかつての 4.43 ㎢の約 4 倍の 16.98 ㎢に拡大、急速に都市化が進んだ。

昭和 56 (1981) 年 4 月に市制を施行、「浦安市」が誕生した。昭和 58 (1983) 年には東京ディズニーランドがオープン、その後も周辺地区に大型リゾートホテルなどが建設され、国際色豊かなまちになった。昭和 63 (1988) 年 12 月に J R 京葉線が開通し、新浦安、舞浜の駅周辺の整備も進み、平成 20 (2008) 年には、人口が 16 万人を超えた。

平成 23 (2011) 年 3 月、東日本大震災において液状化による被害を受けたが、ライフラインの復旧・復興は最終段階となっている。

平成 29 年 3 月、内田悦嗣新市長が就任し、誰もが自分のライフスタイルを実現できる“市民が主役のまちづくり”の実現にむけ、邁進している。

(3) 浦安市立図書館の概要

浦安市立図書館は、昭和 32 年 (1957 年) 浦安町役場教育委員会内に設置された図書室からスタートし、昭和 44 年 (1969 年) 浦安町立図書館として開館、昭和 58 年 (1983 年) 浦安市立中央図書館が現在の場所に開館した。

平成 29 年現在、中央図書館と 7 つの分館、市内 3 つの駅前のサービスコーナーによりネットワークを構成しサービスを行っている。

蔵書は図書約 117 万冊、雑誌の年間受入数 537 タイトル、視聴覚資料 2 万 6 千点を所蔵している。市民一人当たりの貸出冊数は 12.05 冊と、全国市区町村平均 5.50 冊を大きく上回る。

浦安市立図書館は、ほぼ歩いて 10 分でいずれかの図書館施設へ行ける全域サービス網、豊富な蔵書群、図書館資料と市民を結び付ける司書によるサービス、こうした点が浦安市立図書館の特徴である。さらに、すべての市民にサービスを提供できるよう、夜間祝日、月曜開館など施設利用の利便性向上を実現しながら、児童サービスやレファレンスサービス、ハンディキャップサービスなどを展開し、質的な充実を図ってきた。

2 地域資料収集の取組

浦安市立図書館では、中央図書館の開館以来地域の歴史や行政資料、市民の著作物などの地域資料について、収集に取り組んでいる。図書に限らず、地域のミニコミ誌や議員の議会報告、広告チラシに至るまで網羅的な収集に努めてきた。浦安市関係新聞記事のクリッピングも行っている。また、東京ディズニーランドに関連する資料の収集も特色の一つである。一方で、昭和初期以前の地域資料の収集についてはほとんど実績がない。これは、台風などの災害により古文書等が被害を受け、ほとんど残っていないなかったということが影響している。

3 「浦安アーカイブス」撮影ボランティア

(1) 事業内容

昭和 63 年より浦安市立図書館の地域資料サービスの一環として、浦安市内の移り変わりを記録し、保存するために市内所定の撮影ポイント 43 箇所、延べ 119 枚（平成 29 年度）となる、「定点撮影」を行ってきた。「定点撮影」においては、毎年同一アングルで撮影した写真を、蓄積保存する取組であり、これによって市内における経年変化を、ビジュアルに記録する取り組みである。「浦安アーカイブス」は、これまでの「定点撮影」の取組を拡充したものである。

(2) 「浦安アーカイブス」における市民との協働

昭和 63 年事業開始時より平成 22 年までは、図書館職員が全ポイントの撮影を行っていたが、市事業の市民協働化の一環として平成 23 年度より市民ボランティアに依頼することになった。

そこで、平成 23 年 10 月 29 日に浦安市視聴覚ライブラリーにおいて開催された「初心者に

ための写真教室」受講者に対し、ボランティア協力への呼びかけを行った。初年度は 2 名の応募があった。その後は例年およそ 3、4 名の応募がある。

ボランティア募集の準備として、初見でも撮影ポイントの場所や撮影の際のカメラの角度等がわかるよう、マニュアルを整備した。

面積 16.98 km²、東西 6.06km、南北 6.23km と狭い市域ではあるが、市民ボランティアの便を鑑み、ボランティア市民の居住地域、もしくは隣接地区を依頼するようにしている。

(3) 今後の展開

参加したボランティアから、「自分の住む地域に貢献できた」、「地域の歴史をビジュアルに残すことができる」、「町の歴史を直観的に伝えることができる」といった声をいただくことができた。また、市民ボランティア撮影の写真を図書館ホームページに掲載することにより、市民に図書館の知られざる業務に関心を持ってもらうことができたと思われる。

また、撮影ポイントの大部分を市民ボランティアが担うことにより、職員の業務を軽減することができた。

今後の課題として、市民ボランティアを広げて、様々な市民が撮影ボランティアとしてかわり、地域の歴史にかかわることができよう環境を整えていくことがあげられる。



昭和 63 年 新浦安駅



平成 28 年 新浦安駅（ボランティア撮影）

4「浦安震災アーカイブ」に対する、資料提供

(1) 事業内容

ア アーカイブ誕生の背景

平成 23 (2011) 年 3 月 11 日の東日本大震災では、浦安市も大きな被害を受けた。浦安における被災状況で特筆されることは、「液状化」による被害であり市域の約 86% で液状化の被害が発生するという前例のない規模となった。このため、死者は 0 人であったが、建物の被害が全壊 24 棟、大規模半壊 1,560 棟、半壊 2,185 棟、一部損壊 5,385 棟となった。また、市内の道路も液状化によって損害を受け、市内の道路総延長 234.5km のうち、被災延長 79.9km となった（「浦安市復興計画」平成 24 年 3 月より）。このような被害状況は、人口の流出を生み、平成 23 (2011) 年 3 月末に 165,128 人であった浦安市の人口は、その後およそ二年間にわたって人口が流出した。

震災被害の応急対応にある程度めどが立つと、被災からの復興をどのように進めるか、液状化の街というイメージから脱却し、都市ブランドを回復・向上させるには何が必要か、ということが議論されるようになった。災害復興と都市ブランド向上のための取組、すなわち液状化の街からの脱却に向けて、平成 23 年 11 月に浦安環境共生都市コンソーシアムが発足した。このコンソーシアムは、浦安市、市内の明海大学、民間企業による産・官・学が対等な立場で連携(平成 23 年 11 月発足)するものであった。

東日本大震災で発生した、液状化の被害について当時の記録や体験を後世に語り伝えたいという考えは、応急・復旧の取り組みの中から生まれてきた。こうした問題意識がのちに策定される浦安市復興計画（平成 24 年 3 月）としてまとまることとなった。

これを受けて、震災情報の発信に関し、市議会における一般質問（平成 25 年 3 月）があり、一方で浦安市立図書館が、図書館における「電子資料提供サービス」について情報収集と研究を進めてきた経緯があった。こうした状況を踏まえて、電子資料の導入に関する検討委員会を設置する運びとなった。

イ 浦安市電子資料導入検討委員会

浦安市電子資料導入検討委員会が設置され、様々な課題を検討する中で、「浦安震災アーカイブ」の目的もより具体化されていった。

「浦安震災アーカイブ」は、平成 24 年 3 月策定された、「浦安市復興計画」に基づいて、3 つの目的を実現することとした。第一に、東

日本大震災の脅威と復興への取組を後世に継承するため、震災による被災状況や応急対策活動、復旧、復興の取組を記録、保存し、その利活用を促進する。第二に、子どもたちが、自分の身の守り方や、災害に対応する力を身につけることができるように、保育園、幼稚園、小・中学校における新たな防災・環境教育を促進する。第三に、市民が、家庭や職場における備蓄や避難行動などの自助や、地域における共助に取り組むことができるよう、必要な知識を学べる環境を作る、とした。

また、アーカイブシステムを構築する経費については、総務省の「被災地域記録デジタル化推進事業」補助金を活用することとし、補助金交付申請を平成 26 年 10 月 31 日付で行った。これを機に、アーカイブシステム構築のための様々な準備作業を進めた。

平成 26 年 12 月 4 日付で補助金の交付が決定した旨が通知され、直ちに補正予算を編成した。12 月下旬から、プロポーザル方式による業者の公募、選定を経て、受託業者を選定し、アーカイブシステム構築及びコンテンツ作成業務委託の作業を開始した。

ウ 「浦安震災アーカイブ」の公開

平成 27 年 7 月 1 日より、浦安震災アーカイブはコンテンツの公開を開始した。当初のコンテンツ総数は、約 4 万点であった。その多くは、行政情報（浦安市などが作成した文書や写真、動画）であったが、民間・大学・研究機関等の資料が 2 千点余り、市民などから聞き取りしてまとめた当時の体験談が 186 点含まれている。

(2) 浦安震災アーカイブにおける市民との協働

行政情報を主体として浦安震災アーカイブは動き出したが、課題を抱えながらの運用となっている。浦安震災アーカイブにおけるもっとも大きな課題は「コンテンツの充実を図る」ことである。現在のコンテンツは、行政資料中心で住民目線の震災当時の資料が少ない。現在、市内の自治会等に呼びかける等の働きかけを行い、住民が当時作成していた資料の収集に努力している。資料といっても、手書きの簡単なものからパソコンを駆使してまとめられたものなどさまざまであるが、市民サイドの震災資料の収集に努めている。

もう一方は、震災当時の体験を市民に語ってもらい、それを体験談としてまとめコンテンツ化する取組である。東日本大震災による被災状況は、市内の場所によって大きく異なっており、震災時にどこにいたかによっても体験が大き

く異なっている。こうした点に着目して、震災アーカイブのコンテンツに体験談を組み込むことにした。

体験談の作成に当たっては、市内の地域ごとに体験談が収集できるように配慮した。市民ボランティアを募集する際に地域のばらつきが出ないようにしながらボランティアを決定した。また、委託業者がインタビューを専門に行う、プロのインタビュアーを動員した。聞き取りの際は、インタビュアーと、市民ボランティアが直接面会し（多くは、中央図書館を会場とした）、聞き取った内容を体験談としてまとめている。

ボランティアの内訳については、①市民公募 89 名（10～80 代の男女）、②浦安に拠点を置くサッカーチーム「ブリオベッカ浦安」の選手 3 名、③浦安鐵鋼団地組合 3 名、の合計 96 名である。

（３）今後の展開

浦安震災アーカイブは、大きなトラブルもなく現在まで運用を継続している。平成 28 年度においては、年間ページビューは 68,312 件となり、コンテンツに対する利用許諾申請も 17 件、のべ 60 コンテンツが利用された。

しかし、浦安市復興計画で構想したように、震災当時の資料を市民が活発に利活用し、防災に取り組んでいくためには更なるコンテンツの充実が必要であると考えている。今後、充実させるべき資料は住民の手元にある、当時の資料であるがどこに、どのような資料が存在しているのか、情報を集めるだけでも多くの困難がある。一方で、震災当時の記憶については、市民の中にも「思い出したくない」とおっしゃる方もいる状況である。

このような状況の中で、地道に震災アーカイブの意義などについて市民への広報周知し、理解を広げていくことが必要である。子どもを対象とした「夏休み子ども防災教室 in 図書館」や浦安市総合防災訓練での PR に努めながら、引き続き当時の資料の提供を呼び掛けていきたい。住民の手元にある震災資料は、短期的な取組で収集できる資料ではないので、息の長い取組を継続していく必要があると考えている。

（浦安市立中央図書館 奉仕第 2 係 居倉英夫）

富山県立図書館における行政資料デジタルデータ公開サービスの取組

基本データ

自治体名	富山県
図書館名	富山県立図書館
人口	1,056,925人
職員数	33.3人
うち、地域資料担当の	
専任職員数	0人
兼任職員数	2人
蔵書冊数	850,151冊
年間貸出冊数	166,286冊

図書館外観



1 富山県及び富山県立図書館の概要

富山県は日本海に面した北陸地方に位置し、県庁所在地である富山市を中心に半径 50 km 以内に収まるコンパクトな地形である。富山県立図書館は富山市郊外の呉羽丘陵に立地し、周辺は県公文書館、県埋蔵文化財センターが隣接する文教地区となっている。市街地から離れていることもあり、じっくり読書を楽しむ人、資料の調査をする人等の姿が見られる。

運営方針として、(1) 調査研究のための図書館 (2) 図書館のための図書館 (3) 保存のための図書館 の3つを掲げ、県民の生涯学習ニーズに応えている。

2 行政資料デジタルデータ公開サービスの概要

(1) サービス開始の経緯

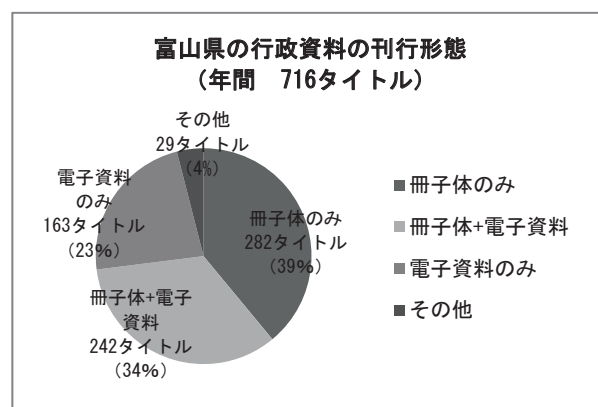
行政資料のほとんどは一般の販売ルートには乗らないため、まずその刊行状況を把握することが重要になる。当館では毎年、県の各部局および市町村へ「刊行物実態調査」を実施しており、あわせて県立図書館への資料提供を依頼している。これによって各自治体から送付される冊子体の印刷物を原則3部ずつ受入している。しかし近年、冊子体の発行をとりやめてPDFファイルをホームページ上に掲載するケースが増えてきた。そこで、PDF公開のみの場合はプリントして簡易製本し、受入するという体制により継続収集に努めてきた。

その後、公開されているPDFの利便性を生かすには、図書館でもデジタルデータへの対応

が必要ではないかという館内の協議があり、予定されていた図書館システムの更新に合わせてサービス開始に向け検討することになった。収集方法や提供方法については、先行事例として大阪府立図書館の「おおさかeコレクション」や神奈川県立図書館の「神奈川県行政資料アーカイブ」を参考にした。図書館システム本体の更新は平成28年12月に行ったが、行政資料デジタルデータサービスはPDFファイルの収集など準備期間を経て平成29年6月に開始した。

(2) サービスの内容

ア 収集対象



行政資料は広く国および各自治体が刊行するものを指すが、当面は富山県の各部局の刊行物を収集対象とすることとした(県内市町村の刊行物は含まない)。また、冊子体があるものは従来どおり冊子体を優先して収集することとし、刊行形態が電子資料のみの刊行物を今回のサービス対象とした。毎年行う刊行物調査に

刊行形態の記入欄を設け、PDF公開している場合は県立図書館ホームページからの公開の可否について確認した。その結果、刊行形態が電子資料のみの刊行物は163タイトルあり、うち県立図書館での公開の許諾が得られたものは145タイトルだった。この中から図書館で収集が必要と思われるタイトルを絞り、最終的な収集対象資料数は約60タイトルとなった。スタート時は前年度分の刊行物を収集し、順次遡及登録を行うこととした。

＜収録タイトル例＞

- ・「わたしたちの県税」平成28年度（富山県経営管理部納税課）
- ・「地下水の現況」平成27年度（富山県生活環境文化部環境保全課）
- ・「富山県の生活習慣病」平成28年（富山県厚生部健康課） など

イ 収集方法

刊行物調査の結果をもとに、県ホームページの各部署を探索してPDFを入手した。

ウ 提供方法

当館OPACの検索結果にPDFを表示する方式とした。また、来館利用者の利便性を考慮し、一覧性のある紙媒体も同時に必要との考えから従来どおりプリントした紙媒体も2部作成、受入し、現物の閲覧・複写・レファレンスに対応することとした。紙媒体から電子ファイルへ切り替えるというより、両方を収集するという考え方で収集・提供している。



OPACの検索結果にPDFを表示

3 成果と課題

（１）成果

館外からOPACを検索した場合、来館せずに直接PDFファイルを閲覧できるようになり電子ファイルの利点に対応可能となった。検索結果に紙媒体の所蔵とPDFファイルを一括表示することで利用者の選択肢も広がった。また、刊行元のホームページでリンク切れや差替えなどにより閲覧できなくなった過去のファイルが今後図書館で蓄積・公開できる方向性

ができた。

（２）課題

現行ではOPACの検索結果でのみ表示するため、目的の資料名がはっきりしていないとPDFがあることがわからない。今後は全体として電子ファイルがある刊行物を一覧できるアーカイブ形式も検討する必要がある。また、従来どおり紙媒体も同時に作成・収集することにしたため、業務の省力化とはならなかった。

今回は当館の図書館システム更新のタイミングで改修を行うことができたが、次回以降の更新で同じサービスを継続する場合は、カスタマイズが必要となることも懸念材料である。

これらの課題については、現段階では県立図書館が単体で対応しているが、将来的には県当局との連携が望ましいと思われる。現状では富山県では県ホームページに掲載される刊行物の電子ファイルの管理は各部署がそれぞれ行っているため、最新版のみ掲載するものもあるなど、対応がまちまちで公開方法に統一性がない。県文書総務課では今のところ冊子体の刊行物のみを把握していて、電子ファイルの公開については各部署の判断とのことであった。

例えば県のホームページで電子ファイルを差替えせずに、累積して表示できるしくみになれば、直接県のホームページへのリンク案内ができ、図書館でファイルを取り込んで保存する作業が不要になる。利用者にとっても統一されたひとつのアーカイブを参照することができてわかりやすく、県立図書館に限らず市町村図書館でも共用が可能となるだろう。これらの点については、事例として神奈川県では県が主導して著作権管理から県立図書館と県公文書館へファイル配信までの流れが確立しており、参考となるとと思われる。

4 今後の展望

今後、当面は当館の公開方法を改良していく予定だが、将来的には課題で先述したように県当局との連携を図り、全県域でアーカイブを運用・活用できることが望ましいと思われる。

（富山県立図書館 資料課 温井佳子）

下條村立図書館における地域資料サービスの取組

基本データ

自治体名	長野県下條村
図書館名	下條村立図書館
人口	3,836 人
職員数 うち、地域資料担当の	3.6 人
専任職員数	0 人
兼任職員数	1 人
蔵書冊数	84,737 冊
年間貸出冊数	55,653 冊

図書館外観



1 下條村及び村立図書館の概要

下條村は、長野県の最南端下伊那郡のほぼ中央に位置し、飯田市街からは時間距離で約 20 分、三遠南信自動車道天竜峡インターからは 6 ～ 7 分で来ることができる。

全体面積は 38.12 ㎢、山林面積は約 70%、標高 332～828m の間に 34 の集落が散在している。

（１）村の行財政改革

人口は、戦後復興時には 6,400 人を超えていたが平成に入り 3,900 人以下に落ち込んだ。しかし村の行財政改革により、ピーク時の人口は 4,230 人（平成 19 年度）となり、平成 12 年から 22 年までは、4,000 人から 4,200 人の間で推移してきた。少子化対策を充実させ、合計特殊出生率は最高で 2.20 人（平成 22 年度村試算）、14 歳までの人口が全人口の 17.1%（平成 19 年度）を占める県下で最も子ども（人口割合）の多い自治体となった。平成の大合併にも迎合せず単独村として自立の道を歩み、実質公債費率（自治体の財政健全度を示す財政指標）はマイナス 6.6%（平成 26～28 年度全国 1 位）など、全国的にも視察の訪れる健全財政自治体として注目されてきた。

しかし、出生数はここ数年減少し、村ではこれまでの事業を見直し、人口減少対策として移住・定住の促進事業に力を入れている。

（２）村の図書館

上記の行財政改革を行ったのが、6 期 24 年間（平成 4～28 年）村長を務めた伊藤喜平氏である。村長選挙に当選し、初の大事業が図書館

建設であり、平成 7 年 7 月 7 日に開館した。

図書館の入る複合施設の愛称は、村民に募集し「あしたむらんど下條」と決まった。「明日に向かってこの地から広がっていくように」という意味、願いが込められている。

今年度開館 22 周年を迎えたが、貸出が多く開館より人口一人当たりの貸出冊数は長野県下で 1～3 位を維持している。開館から、おはなし会、おたのしみ会、としょかんだよりの発行などを実施、利用者の要望に沿った資料収集で蔵書を形成することを基本理念とし、「利用してもらうための図書館」を目指してきた。

2 地域資料サービスの概要

地域資料に関しては、小規模図書館でも 1 つの行政区として独立した資料収集が望まれるため、開館からできる範囲で収集に努めてきた。当館は村外利用者も多く、近隣市町村更に長野県内の資料も必要程度収集している。

当館の「郷土資料コーナー」は、2 か所に分かれている。1 か所は一番奥の畳のコーナーに配置される①長野県内資料及び②飯田下伊那地域の資料書架（約 2,000 冊）。もう 1 か所は、閲覧机近くの③下條村の資料コーナーで、数少ない村独自の資料が配架される（約 200 冊）。

（１）下條村の資料コーナー

ア 村関連新聞記事のスクラップ

毎朝、新聞 5 紙（全国紙 3 紙、郷土紙 2 紙）を職員がチェックし、下條村に関する記事を手紙をコピーし、役場・小中学校へそれぞれ

回覧する。保存分はスクラップ帳に貼り付け、22年間で58冊の「下條村に関する新聞記事」スクラップ帳を所蔵し閲覧可能である。

イ 伊藤喜平前村長による行財政改革資料

ウ 村出身タレント峰竜太に関する資料

**エ カッセイカマン（村のご当地ヒーロー）
に関する資料**

オ その他 村内刊行物

『下條村の民話と伝説』『下條歌舞伎保存会 40 周年記念誌』、村内各地区発行の地域資料、青年会・婦人会・史学会資料、公民館資料、広報、個人出版物等がある。

カ ファイル資料

行事案内チラシほか、紙ベース資料をファイル資料として書庫に保存している。

（２）村制作のDVD貸出コーナー

村の行事記録（小中学校、保育園の入学・入园式、卒業式、音楽会、運動会、村の文化祭、カッセイカマンのイベント及びドラマ、神社奉納・祭りの様子等）を業者に委託し撮影。村内ケーブルTVで放送後、DVDに保存。図書館でリクエストが出たものについては、村の企画財政係に依頼し、図書館貸出用DVDを製作してもらう。通常のDVD貸出コーナーに配架し利用される。



下條村の貴重な地域資料DVD

上記いずれも一般利用者だけでなく、小中学校の調べもの学習、役場職員や村会議員、出版関係者などにも利用がある。

3 特色あるサービス

（１）郷土資料刊行記念おたのしみ会

当館では、年間10回ほど専門の講師に指導・上演をお願いするおたのしみ会を毎年開催している。人形劇、けん玉、工作教室、料理教室など内容は様々だが、図書館に来たことのない人にも一度足を延ばしてもらえよう話題性も考慮しながら企画している。その中で、郷土

資料（村の文化団体が刊行）をテーマにした「図書館の外へ出かけていくおたのしみ会」をこれまで2回、各資料が刊行された年に開催した。

ア 「ふるさと民話たんけん」

平成22年度、下條史学会により『下條村の民話と伝説』が刊行され村内に全戸配布された。村で初めて大人が子どもに読んであげられる昔話の絵本ができた。村の資料の中でも、きちんとした本の形をとるものは少ない中で、郷土資料が刊行されたことはたいへん喜ばしいことである。よってこれを記念して民話に出てくる跡地を訪ねる「ふるさと民話たんけん」を夏休みおたのしみ会（史学会・公民館共催）として開催した。

「小学生夏休みの一研究の題材にもおすすめ」として8月上旬に開催、幼児から小学生とその親等約20名の申込みがあり、当日は公民館主事が運転するマイクロバスに全員が乗り、訪れた各跡地では地域の方がその由来などを説明。その様子を企画財政係の職員と、村役場に職場体験に来ていた中学生が撮影し、後にケーブルTVで放映された。翌平成23年度、『下條村の民話と伝説』続編も刊行された。

イ 「ふるさと歌舞伎たんけん」

下條村には、300年の歴史をもつ下條歌舞伎（村指定無形民俗文化財）が伝わる。平成24年度、下條歌舞伎保存会が結成されて40周年を迎えたことを記念し、『下條歌舞伎一保存会設立四十周年記念誌』が保存会により刊行された。これを記念し「民話たんけん」と同じく、夏休みおたのしみ会として8月17日に「ふるさと歌舞伎たんけん」を開催した。村歌舞伎の歴史を今に伝える場所を訪ねるもので、公民館と村歌舞伎保存会が共催した。

当日は、記念誌を持参した参加者約30名がゆかりの場所で、保存会会員らの話を聞いた。下條村では、小学生までは「子ども歌舞伎クラブ」（村歌舞伎保存会主催）、中学生は「歌舞伎クラブ」（部活動）があり、中学校や村の文化祭では毎年必ず村歌舞伎が上演されている。「歌舞伎たんけん」参加者も、これらに携わる子どもやその家族が多く、普段は知らずに上演したり観たりしていた歌舞伎の魅力に、実物を通して触れる貴重な機会となった。

陽阜（ひさわ）地区の皇太神宮に村内唯一現存する舞台がある。壁には1922年（大正12年）9月24日に愛知県的一座が書いたとみられる墨書きがあり、その構造などから明治後期から大正初めの建築と推定される。舞台を背に参加者全員で記念写真を撮り、村内12か所の史跡巡

りは終了となった。



村に唯一残る地芝居の舞台（皇太神宮）を訪れた「ふるさと歌舞伎たんけん」

ウ 下條歌舞伎資料展の開催

上記関連事業として、同年7月中旬から8月下旬まで「下條歌舞伎資料展」を当館建物内のアートギャラリーで開催した。記念誌をつくるにあたり、村内各地から発見された幕・台本・小道具・写真などの貴重な資料とともに、記念誌に使われた多くの写真を展示した。来館した利用者が、下條歌舞伎の一端を知るためのよい機会となった。

（2）おたのしみ会で「子ども歌舞伎」の上演

平成20年3月、高齢者学級と共催のおたのしみ会で、下條村子ども歌舞伎クラブによる「子ども歌舞伎一寿會曾我対面」が上演され約100人が観覧した。

（3）郷土資料『下條歌舞伎一保存会設立四十年記念誌』への寄稿

＊下條歌舞伎と河竹繁俊についての史実記録

ア 河竹繁俊について

日本演劇界の巨匠、河竹繁俊（黙阿弥の後嗣。歌舞伎研究・日本演劇研究第一人者、早稲田大学演劇博物館生みの親で二代館長、文学博士、著書多数。文化功労者他表彰）は、下條村の隣の飯田市山本（旧信州下伊那郡山本村）の出身である。繁俊（旧姓：市村）は早稲田大学へ進学後、坪内逍遙が始めた「文芸協会演劇研究所」の第1期生となり島村抱月、松居須磨子らと共に新劇運動に身を置いた。やがて坪内逍遙の推薦により河竹黙阿弥家の養子に迎えられ河竹繁俊となり、日本演劇界・歌舞伎界へ大きな功績を残した。

イ 母の在所と繁俊の兄弟

この繁俊を生んだ母は、下條村生まれで先に紹介した歌舞伎舞台の残る皇太神宮の近くに在所があり、下條歌舞伎に幼少時から親しみ成

長したという記録が残っている。「素人ばなれしていた」浄瑠璃好きの母は、山本村の市村家へ嫁ぎ四男一女を授かった。長男は下伊那在住でありながら全国的に名をはせた郷土史研究者で教育者の市村咸人（みなと）、次男は金城学院大学創始者の市村与一、三男が河竹繁俊、四男は生家を継いだ市村奨（すすむ）、繁俊のすぐ上の姉ゆきみは、下條村（母の在所近く）の旧家中島家へ嫁いでいる。

この中島家は、下條村に二つしかない郵便局のひとつ、陽阜（ひさわ）郵便局を代々経営する旧家で、村図書館の分館的サービスを自ら申し出、局利用者に本の貸出を18年間続けて（平成11年より無償ボランティア）、平成26年度第44回野間読書推進賞の奨励賞を受賞している。

ウ 歌舞伎・浄瑠璃好きの父母

河竹の母の在所（下條村）は、家族皆が「たしかに芝居きちがいだった～（中略）～そんなわけだから、母の口から歌舞伎の代表的作品はたいてい聞いていた」と『ずいひつ牛歩七十年～少年時代と芝居』に繁俊は綴っている。また父親の育った山本村にも人形浄瑠璃が伝承されており、父もやはり芝居好きであったという。そうした生い立ちから、幼少期より歌舞伎・浄瑠璃を聞いて育った繁俊に及ぼされた文化的影響は大きかったと思われる。

現在はこうした歴史的事実の資料も少なく、血縁者の中でも高齢者しか知らない。村内の歌舞伎関係者も知らないという現状を踏まえ、「日本演劇学の巨匠を生んだ土壌は、下條村にあった」というタイトルで記念誌に寄稿した。

（4）ご当地ヒーロー：カッセイカマン

ア カッセイカマンの活躍

下條村には「地域の景気と元気を守る下條村のご当地ヒーロー」カッセイカマンがいる。3人のヒーロー（ダイコンレッド・オオグテブルー・コスモスピンク：いずれも村の観光資源をキャラクターにしたもの）が地域のために日夜、悪の結社（フキョーダ）や怪人たち（カクハカイ、カツジバナレ、ネンキンホウカイ等）に立ち向かい闘っている。主催団体カッセイカマン・プロジェクトは平成15（2003）年に立ち上がり、村内外の有志約10人で運営され、ご当地ヒーローの草分けとされる。活躍は村内だけにとどまらず、北は岩手から南は沖縄まで日本全国から依頼を受け年間60～80回の公演を行っている。

イ 図書館とカッセイカマン

図書館のおたのしみ会でも「カッセイカマンショー」の公演を2回実施。そのたびに200人を超える参加者に会場は熱気にあふれ、歓声が飛び交っていた。カッセイカマン生誕10周年の年には、おたのしみ会に合わせ「カッセイカマン10年のあゆみ展」を行い、年譜と写真を図書館ロビーに展示した。時代を経て進化するカッセイカマンの姿に、子どもから大人まで多くの見学者が訪れ楽しむ姿が見られた。

14周年を迎えた今も活動はますます盛んで、「地域の景気と元気を守る」カッセイカマンには誰もが愛着を感じ応援している。現代の歌舞伎ともいえるカッセイカマンは、郷土の大切な文化資源となっている。

ウ カッセイカマンの資料

カッセイカマンに関する調べものは多く、小中学校で「村のことを調べる」学習では必ず項目にあがってくる。書籍もいくつかあるが、さまざまな方面からの資料収集に努めている。

(5) としょかんだより

『としょかんだより』は、図書館の新鮮な情報を(来館しない)村民に届けるため、開館年の秋から隔月で発行してきた。A3版の厚口の色紙の両面に4ページ二つ折りの体裁で制作、印刷し全戸配布している。内容は、巻頭ページに人気の「としょかん大好き家族」、見開きのページは図書館のイベント情報等、最終ページは新刊案内で定着している。

発行日から2~10日ほどかかって各家庭に届くが、久しぶりに来館する利用者、新刊案内に掲載された本を求めて来る利用者、「としょかん大好き家族」の候補になりそうな家族などが、通常時より大勢訪れるような手応えがある。

2012年9月で100号を達成し、「としょかんだより100号記念展」を開催した。1~100号までのすべての号を展示、また「としょかん大好き家族」に登場した83家族の写真を展示した。現在、133号まで発行しており村民に親しまれ読まれている。

(6) 開館20周年記念誌&利用ガイドブック ア 図書館記念誌づくり

平成27年度、開館20周年を記念して様々な取組を行った中に、『開館20周年記念誌~小さな村の元気な図書館/下條村立図書館ガイドブック~活用のツボ』刊行事業があった。村民、利用者とともに築いた図書館のこれまでの歩みを記録(右開き30p)し、新規利用者開拓のための当館利用ガイド(左開き20p)も合わせ、全体で50ページのA4版カラー印刷入りの手に取りやすい冊子となった。右から開くと記念誌、

左から開くと利用ガイドブックという内容は、これまでの図書館運営の姿を糧として、今後の図書館運営、利用向上に繋げていきたいという願いが形になったものである。

イ 図書館友の会(村民)との協働編集作業

この事業は県の補助金で実施することになり、その条件として「村民との協働で制作する」必要が生じた。そこで、平成27年度、図書館を応援してくれる大人のボランティアを募集したところ、約10名の村民が応募。そのうち平日に来館できる会員数名で、毎月蔵書整理日に編集会議を行い、年度末には記念誌を発行することができた。補助金を使ったおかげで、村民との協働により郷土資料を刊行することができ、大きな収穫となった。

4 成果と課題

(1) 郷土資料刊行記念おたのしみ会

「民話たんけん」も「歌舞伎たんけん」も、通常の「館内で開催するおたのしみ会」に比べれば参加者ははるかに少ない。また、外へ出かけていく催しであることから図書館内へ入らずに終了するため、貸出実績の向上に直接つながるものではない。しかし、どちらも新聞各社が取材し、「歌舞伎たんけん」ではテレビ局も駆け付けNHKニュースで放映され、話題を呼んだ。

また両刊行物の編集作業において、村図書館が執筆協力などで史学会、歌舞伎保存会と深く関わることとなり、村に根を張る文化団体の中身に触れる経験ができ、文化を担うという認識(使命)を共有できたことは何にも代えがたい財産となった。この3冊の郷土資料は、有効な地域資料として村民に周知され、今後の地域活性化、文化の底上げにも役立っていくのではないかと思う。

(2) その他

おたのしみ会や、としょかんだより等で、村民や団体に図書館に関わってもらう機会をつくることは、数字には表れないが長い目で見れば大きな成果をもたらす。図書館の存在を示すよい機会でありながら、村民の活動をもクローズアップできるため、今後も更に可能性を広げていきたい。

5 今後の展望

(1) 地域資料収集の難しさ

新しく書籍や冊子の形になったものは、図書館へ運ばれてくるが、それ以外の特に時代をさかのぼる資料の収集は難しい。

下條村には考古資料館等はなく、歴史を伝えるさまざまな資料を保存する場所は図書館しかない。村役場倉庫にある古文書類、各家庭に眠る貴重な地域資料等は、価値を見定められず廃棄されることが多いときく。図書館職員がこうした資料を引き取って判別し、分類して保存するだけの時間や手間もなく放置されているのが現状である。今後、時間はかかっても村全体の文化意識が高まり、こうした現状を変えていく手立てが見つかることを願う。

（２） 地域文化との連携

図書館は村の文化を担う拠点として、村民や各活動団体との協力体制を常に持ち、連携を図っていく。縁ができれば、頼りにしたり頼られたりをくり返し、一部の人の利用から多くの利用へと広がっていくのではないかな。そして村を愛する気持ちが、図書館を愛し育てる気持ちに変わっていけば、文化は受け継がれていく。

脈々と続いてきた村の人々の暮らしや想いを伝え、伝統文化を守り残すことは、図書館のひとつの使命である。世界でひとつしかない地域資料の充実へと繋げていきたい。

（下條村立図書館 近藤明子）

田原市中央図書館における地域資料サービスの取組

基本データ

自治体名	愛知県田原市
図書館名	田原市中央図書館
人口	63,174 人
職員数 うち、地域資料担当の	27 人
専任職員数	0 人
兼任職員数	5 人
蔵書冊数	317,977 冊
年間貸出冊数	611,581 冊

図書館外観



1 田原市及び図書館の概要

愛知県の最南端に位置する田原市は、渥美半島のほぼ全域が市域となっている。海と山に囲まれた風光明媚なまちで、恋路ヶ浜や太平洋ロングビーチなどが景観スポットとして知られている。野菜や花きは全国有数の産地であり、平成 26、27 年の農業産出額は全国 1 位である。

田原市図書館は、平成 14 年 8 月に開館した中央図書館ほか、赤羽根・渥美の分館 2 館と市内の小学校を巡回する移動図書館車 2 台で運営している。中央図書館はサービス部門が 9 チーム、棚管理部門が 5 チームに分かれており、職員は複数のチームに所属している。

2 地域資料サービスの概要

中央図書館では、「郷土研究室」に歴史や文学、「地域資料コーナー」に地域の観光案内や行政・学校・自然等の資料を配架し、この二つのコーナーを紹介する案内マップ「郷土の部屋」を図書館ウェブサイトで公開している。市の機関で発行された行政資料は「田原市図書館条例」（第 5 条）を根拠に無償で納入され、一部の製本資料や貴重書を除くほとんどの資料を貸し出している。担当職員は参考郷土チームの 5 名である。

参考調査以外の主なサービスには、地域をテーマにした展示や講座等のイベント、「田原市新聞記事見出しデータベース」の作成を含む「行政・議会支援サービス」、「ふしぎ文学半島プロジェクト」の実施などがあげられる。

展示やイベントは、他の機関と連携して行うことが多い。平成 28 年度にはパネル展「魅力対決！豊橋 v s 田原」を豊橋市図書館と、平成 29 年度には郷土の偉人として知られる渡辺崋山のトークイベントを公益財団法人崋山会及び田原市博物館と共催した。

3 ふしぎ文学半島プロジェクトについて

平成 24 年 11 月、中央図書館 2 階に「泉名月（なつき）記念ふしぎ図書館」がオープンした。故人である泉名月は文豪・泉鏡花の姪で、鏡花の没後にすず夫人の養女となった田原市出身の作家である。きっかけは、名月のご遺族より遺品の一部を譲り受けたことだった。「ふしぎ文学半島プロジェクト」は、「ふしぎ図書館」の開館を機に、幻想文学の楽しみと、数々の不思議に彩られた渥美半島の魅力を発信することを目的としてスタートした。毎年多彩なゲストをお招きし、講演会、トークイベント、おはなし会、演劇、演奏会など様々なイベントを企画・実施している。

平成 27 年度には、夜の図書館を舞台に、妖怪たちが神出鬼没に現れ、自らの物語を語り始める「田原&豊橋妖怪百物語～高校演劇ナイトツアー～」を実施した。館内に複数の舞台を設置し、参加者が怪談演劇を見たり死神の語りを聞いたりしながら各ポイントを巡るという内容である。地域の民話や言い伝えを題材とした原作を用い、地元の桜丘高校演劇部に協力を依頼した。

平成 28 年度は「怪談」をテーマに掲げ、夜の図書館の中庭を舞台に「琵琶語り×芝居 耳なし芳一」を実施した。薩摩琵琶奏者の語りと生演奏で物語が展開していく内容で、地元の成章高校演劇部に協力を依頼した。

このプロジェクトの主担当は棚管理部門「7・9門」チームだが、郷土との関わりも深いため2チームで協力体制を敷くことが多い。イベントの規模や内容によっては、その分野に詳しい職員や関わりのある他のチームにも協力を要請し、特別チームを組んで館全体で対応する。

なお、次の二つは、いつでも利用可能である。



「田原&豊橋妖怪百物語」死神の語り

（１）「泉名月記念ふしぎ図書館」

「ふしぎ図書館」は、泉名月の業績を顕彰するとともに、泉鏡花や、彼と親しく田原に縁のある民俗学者、柳田國男にちなみ、幻想文学の魅力を伝えるコレクションである。

開設にあたり、文芸評論家の東雅夫氏、翻訳家の金原瑞人氏、鏡花研究の第一人者である田中励儀氏に基本資料を選んでいただきコレクションの柱とした。毎年テーマを設け、東氏、金原氏をはじめとするゲストにおすすめ本を紹介していただき、ブックリストを作成・配布している。おすすめ本は、購入してコレクションに追加している。

（２）電子書籍「お散歩e本～ふしぎ編～」

平成 26 年 3 月、「お散歩e本」の第 2 弾として「ふしぎ編」を刊行した。「お散歩e本」とは、市内を実際に歩いて地域の「いいところ」探しをするお散歩ワークショップを行い、その成果をガイドブックにまとめた電子書籍である。「ふしぎ編」では、市内にまつわる伝説や言い伝えにコラムなどを添え、写真や動画を交えて紹介している。図書館ウェブサイトからスマー

トフォンやタブレット端末にダウンロードもできる。きっかけは、文部科学省「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」に採択されたことで、図書館、大学、博物館、有識者からなる実行委員会形式で実施した。図書館は事務局となり、ワークショップの実施や「お散歩e本」の制作などを行った。

なお、第 1 弾は、愛知大学・皇學館大学・田原市図書館が共同で「田原市清田・福江校区編」を刊行した。制作は大学が行い、図書館は散策ポイントに関する資料提供を行った。

4 行政・議会支援サービスについて

地域に関する新聞記事をまとめて市役所に配布する「新聞記事速報」のサービス廃止を機に、平成 24 年度「行政支援サービス」をスタートした。現在行っているサービスは、レファレンス、資料の貸出・複写、政策・イベントのPR展示である。平成 26 年度に議会図書室との連携も始まり、平成 28 年度には「行政・議会支援サービス」に名称を改めた。申し込み手続きの簡略化、サービス内容の見直し、行政職員への地道な声かけなどが功を奏し、利用は伸びている。市の施策やイベントを地域に発信する展示では、図書以外に担当部署からパネルや写真、グッズなどを借り受けて活用したり、会期の前半と後半で展示内容を変更するなど見せ方に工夫をしている。



展示「写真でみる田原市議会」

（１）「田原市新聞記事見出しデータベース」

「新聞記事速報」の代替として、平成 24 年 4 月より田原市に関する新聞記事の「見出し」を検索・閲覧できる「田原市新聞記事見出しデータベース」の運用を開始した。対象は地方紙を含む 5 紙で、平成 13 年 4 月以降の記事である。新聞記事のチェック・切り抜きから分類付

与、スキャン、記事入力、画像貼付まで全ての作業を職員が行う。地域の情報を得られるツールであり、図書館ウェブサイトからも利用できるため、一般利用者だけでなく「行政・議会支援サービス」の一環として行政職員や議員に向けてもPRをしている。

5 成果と課題

年々、型にはまらない多種多様な企画が増えている。外部のゲストや地域の人・団体と連携する機会も多く、イベントの規模も拡大する傾向にある。この状況を前向きに捉えて取り組んできた結果、図書館が資料情報だけでなく、人が集い、つながる機会を提供する場になったことを実感している。

しかしながら、新しいことにリスクはつきもので、人・予算・PRに関する課題と向き合う場面は多い。平成28年度の演劇イベントでは、当初、人も物も予算も足りない三重苦の状況にあった。その際、「図書館と図書館員が持っているものと手に入れられるもので代用できないだろうか」と、館全体で知恵を出し合った。結果、演劇経験のある職員が脚本を書き、足りない役者を館長が引き受け、演出の小道具を器用な職員数名が手作りし、舞台衣装は田原市博物館やふしぎのプロジェクトで協力いただいている「ぱったり堂」などからお借りし、無事にやり遂げることができた。

6 今後の展望

地域資料や「ふしぎ図書館」のコレクションは、限りある予算であっても新しい資料を定期的にチェック・追加して魅力的に保ちたいと考えている。それは、図書館の基本的かつ重要な役割である。

これらの資料を使い、図書館を知ってもらうためだけでなく、地域の人々が自分のまちを再認識するきっかけになるようなイベントも展開していきたい。図書館だけで行うことが難しいければ市内外のつながりを広げ、活かしながら、前例のないことにも柔軟に対応していきたい。できない理由を考える前に「どうしたら実現できるのか」を考えた方が、図書館は前に進むことができる。これは実践で学んだことである。

イベントを実施するたびに、PRが十分でないことを実感している。今年度新たに発足したPRチームとも協力し、サービスやイベントの周知方法についても工夫を重ねていきたい。

(田原市中央図書館 河合美奈子)

斑鳩町立図書館におけるデジタル化の取組

基本データ

自治体名	奈良県斑鳩町
図書館名	斑鳩町立図書館
人口	28,205 人
職員数 うち、地域資料担当の	12.3 人
専任職員数	1.8 人
兼任職員数	1 人
蔵書冊数	206,460 冊
年間貸出冊数	336,832 冊

図書館外観



1 斑鳩町及び図書館の概要

斑鳩町立図書館のある斑鳩町は、奈良県北部から矢田丘陵の南端に位置している。

町内には、平成 5 年（1993 年）12 月に世界文化遺産に登録された法隆寺をはじめ、中宮寺、法起寺、法輪寺及び藤ノ木古墳等が散在しており、毎年国内だけでなく、世界の国々から観光客が絶えない町である。

以上の恵まれた歴史的環境の中で、斑鳩町立図書館である本館をはじめとして、3つの公民館図書室を有し、住民へ知的情報を提供している。

とくに本館では、一般書及び児童書を中心とした一階部分の他、二階に聖徳太子及び法隆寺を中心とした地域資料を多数所蔵する聖徳太子歴史資料室があり、専門的な地域資料サービスを提供している。

2 地域資料サービスの概要

（1）聖徳太子歴史資料室概要

本歴史資料室は、平成 22 年 5 月 1 日に開室した。地域資料として、法隆寺・同寺故高田良信（たかだりょうしん）長老からの寄贈も受け、約 7,000 冊の蔵書および古写真約 350 枚を有している。国立国会図書館デジタル化資料送信サービスのほか、「斑鳩の記憶アーカイブ化事業」等、後述する地域資料サービスにより、利用者の満足度向上に努めている。

（2）樋口文庫

奈良県立橿原考古学研究所所長、斑鳩町文化財活用センター長を歴任された故樋口隆康（ひぐちたかやす）氏の蔵書のうち、奈良県内の発

掘調査報告書等 1,325 冊を「樋口文庫」として整理・公開している。

（3）「イカーりる」試験実施

専用のコーナーを設置し地域資料の一部貸出しを行っている。

（平成 28 年 7 月より試験実施）

（4）「これからのまちを考えるブックリレー」試験実施

開かれた斑鳩の価値を作り出すために、外部の研究者やまちづくりに携わる方に、リレー方式で斑鳩のまちづくりに役立つ図書の推薦書評を執筆いただき、図書とともに設置している。

3 「斑鳩の記憶アーカイブ化事業」について

（1）事業目的

住民の方が所蔵する斑鳩に関する古い写真や映像資料を中心に調査し、収集・整理・公開する目的で開始した。事業名となっている「斑鳩の記憶」とは、法隆寺・聖徳太子に関連する図書・古文書資料にとどまらず、人々の生活・文化、写真、映像等の非文字資料、自然・生態等の環境資料までを指すものである。これは人口減少社会において、価値ある斑鳩の魅力や個性を私たち自身で守り、活用していく取組でもあると考えている。

（2）事業経過

ア 事前準備

事業開始のきっかけとなったのは、斑鳩町の建築悉皆調査を手掛けられた、斑鳩町出身の京都大学地域研究統合情報センター（通称 C I A S（シアス）。以下 C I A S という。）助教 谷川竜一（たにがわりゅういち）氏（現金沢大学

新学術創成研究機構助教）から、その研究データの活用方策の打診があったことである。

事前準備として、平成 24 年 10 月に図書館職員、谷川氏、協力団体である京都出身の建築リサーチグループ RAD（ラッド）と町内の主な集落、近代建築の事前調査を行った。

その後住民を交えた 2 回の事前打ち合わせの結果、住民の発案をもとに、町内を通る「道」に着目し、道が写った古写真と記憶を集めたデータベースを構築する方針とした。あわせて、写真の集め方やワークショップの進め方についても協議を行った。

イ 事業開始

上述の準備を経て、平成 25 年 4 月 1 日より、C I A S との共同で事業を開始した。

平成 25 年度は、C I A S がデータベースの基礎開発を行い、RAD がその調整を行った（平成 26 年度以降、構築したデータベースの維持管理は斑鳩町と RAD の委託契約に移っている）。斑鳩町では、RAD による企画・コーディネートのもと、地域に関する情報の蓄積方法、人的資源の発掘整備・活用方法を考案することを目的に、住民、図書館、専門家共同のワークショップを開催した。

ワークショップでは、斑鳩町の道沿いで撮影された古写真を収集し、参加者から撮影当時の記憶や写っているものについて情報を提供してもらう。具体的な作業としては、地域の写真家や郷土史家を中心に町民が集まり、斑鳩の古写真の内容とその記憶を書き起こす作業を行った。

ワークショップは現在まで町内の地域別に計 6 回開催し、斑鳩町内の古写真と住民の記憶を収集してきた。ワークショップの成果物として、写真と記憶を地図上に貼り付けて通覧できるようにしたパネル「思い出マップ」を毎回 1 枚ずつ作成した。

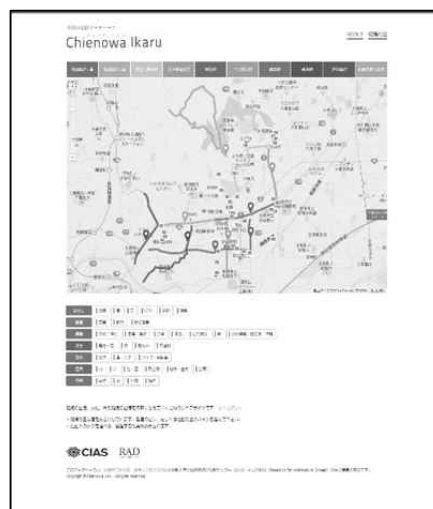


ワークショップで「思い出マップ」を作成する様子

収集した古写真は、図書館職員がスキャナでデジタル化し、年代や撮影場所、記憶、写真の説明など、ワークショップで得られた情報を「斑鳩の記憶データベース」へ入力していった。現在も一連の作業および写真の利用許諾手続きは職員が行っている。

平成 26 年度には、構築中のデータベースの内容・運用方法についての意見を得るため、8 月 1 日に「斑鳩の記憶データベース」の試験公開を行った（公開点数 61 点）。その後、試験公開で得られた意見をもとに、「現代の写真」項目やコレクション（個人写真）項目の追加、二次利用規定の追加等データベースの整備を行い、翌平成 27 年 10 月 1 日に同データベースで 300 点の写真を正式公開した。なお、現在の公開点数は 395 点である。

（URL：<http://archive-ikaruga.org/>）



「斑鳩の記憶データベース」トップページ

（３）事業体制

本事業の事業体制については下記のとおりである。

主催・運営：斑鳩町立図書館 聖徳太子歴史資料室

企画・助言：C I A S（～平成 28 年 3 月）

金沢大学新学術創成研究機構（平成 27 年 10 月～）

データベース構築・ワークショップコーディネート：RAD（建築リサーチグループ）

4 成果と課題

（１）成果

住民の高い関心を得られていると感じている。古写真の閲覧を目的に来室され、写真や地域の情報提供者も増加した。

「昔ここに井戸があつて、水が冷たかった」「川でジミ採りをした」「線路にはディーゼルカ

ーが走っていた」等、写真から当時を振り返って得られた住民の記憶は、当時の斑鳩を知らない新しい住民にとっても、自身の記憶とあいまって斑鳩に親しみを持つきっかけとなっている。

また、斑鳩町制 70 周年記念事業として「斑鳩の記憶データベース」内で公開されている町内の古写真を「広報斑鳩」にて連載した（平成 28 年 10 月号～平成 29 年 12 月号）。同じく斑鳩町制 70 周年記念事業として、平成 29 年 9 月には、住民の方々に斑鳩町の歩みを振り返る機会を提供する目的で、収集した古写真とともに「思い出マップ」を展示する「斑鳩の記憶アーカイブ化事業パネル展示」を行った。

（２）課題

ア 住民の反応

古写真の閲覧等は増加しているが、住民から「懐かしい」以上の反応を得にくいこと。

イ 情報の精度向上

データベースに掲載している情報は記憶に基づいているため、曖昧になっている可能性がある。撮影場所の現地確認や複数人への聞き取り等を行い、情報の精度向上に努めている。

ウ 教育的利用

町内の小学校創立 130 周年記念式典でデータベース内写真の活用があったが、引き続き、教育現場で活用いただけるよう周知、広報を行うこと。

エ 新規情報提供者の開拓

ワークショップ開催準備の折、図書館職員や前回ワークショップ参加者の人脈を伝って参加者を集めることが多い。新規の情報提供者を開拓する必要がある。

オ 各作業の効率化・迅速化

古写真のデジタル化作業や写真の利用許諾作業を迅速に進めていくこと。

5 今後の展望

今後の展望としては、引き続き古写真を収集し、データベースの充実をはかっていきたい。また、「年代ごとに写真を見たい」という意見もこれまでに多く寄せられているため、年代別検索機能等「斑鳩の記憶データベース」の機能拡張や、住民が思いついた時に気軽に写真や新たな記憶提供ができる仕組みづくりとして、「お問い合わせフォーム」を追加する等、データベース自体の利便性を向上させていくことも検討中である。

閲覧するだけでなく、住民が斑鳩に親しみを持ち、地域の絆づくりに貢献できるようなデ

ータベースづくりに努めたい。

（斑鳩町立図書館 館長 竹口万五市、担当 磯田真理・宇野晶子）